

対談：福島の声聴く ― 復興から街づくりへ

南相馬市／
青果食品お惣菜スーパー Saiya 店長
西野貴守 (にし の たかし)

中京大学／日本学術振興会特別研究員 PD
池田功毅 (いけだ こうき)



2013年度からスタートした、科研費研究『リスク認知とソーシャルメディア情報拡散過程の進化論的解明：基礎研究から社会実装へ』の一環として、私たちのグループでは原発関連の風評被害が起こるメカニズムの解明を試みてきた。その中で、実際に実験参加者に福島県産の農作物を食べてもらい、それに対する心理反応を測定するという実験を行った（実験の詳細は本誌17～18ページを参照）。一昨年夏、この実験に素材を提供してくれる方を探すため、私たちは福島県内の青果店やスーパーを巡ったのだが、その途中、南相馬市にある「青果食品お惣菜スーパー Saiya」の西野貴守店長にお会いし、その後現在まで、実験へのご協力をいただいている。今回私は、再び南相馬を訪れ、西野さんに研究進捗状況の報告を行った。報告終了後、西野さんに、南相馬の現状や、研究に対する感想などのお話を聞かせていただいた。（池田）

池田 震災からもう4年半経ちましたが、お店や街はいかがですか？

西野 市で把握している人口は震災前から減少しましたが、除染や復興事業の作業員の方が1万人以上いて、市外の方で仮設住宅で暮らしている方もたくさんいて、お店の客数は増えています。売り上げは上がっていて、街はどこも人手不足です。うちも時給を上げて来ない状況ですね。

池田 僕らは結局外部の人間で福島に住んだこともないわけですが、

私たちの話を聞かれてどういう風に感じていらっしゃるんですか？

西野 例えば県外のNPOの方が「地元の協力者を立ててください」という条件で補助金が出る、お願いできませんか」という感じで来られると、正直悩みますね。ただ、目的を説明してもらえれば、協力するかどうかは、それで判断しています。

池田 僕たちの研究についてはどう感じていらっしゃるんですか？

西野 初めて池田さんとお会いした時に、僕はホント心理学に興味があって。心理的に解明したいというか。頼まれたことが自分でもできることだったので、利害が一致したのかなと思って。不安などの感情で、拒否・拒絶してしまうところを、好意的になったり社会的に意味があると考えてもらえるような何かを発見できれば、それはものを売る僕たちにとっても役に立つと思って、協力しようと思ったんですね。

池田 僕たちの研究は、まだ基礎的なデータを集めたりしているだけで、現実社会に対して何かを還元できるっていう段階に来ていないのですが。どう見てらっしゃいますか？

西野 他の人だったら、何の役に立つかわかんねーのにどーすんだよとか、もっと早く答え出してくれよっていう言う人もいるかもしれないですが、僕はそんな風には思わなくて。時間は必要だと。何事にも。そんなすぐに答えが出たら、こんなに混沌とした世界には

なってないと思ってますから。だから焦らない。僕自身が焦ってないので。何度も何度も実験を繰り返して、何かが見つかったことが正解だと思っているから。

池田 いやー、そう言っていただければ（笑）。では今後の西野さん自身、あるいは地域での展望をお聞きしたいんですが。

西野 個人としては、情報を正しく区別、認識できる人間になろうと思っています。お店としてやりたいことは人材育成です。物事を判断する力を養ってもらいたい。感情で、誰かが言ったからやってみよう、信じてみようとかではなくて、物事に対してメリット・デメリットが判断できるようになってほしい。

街単位で考えると、自分の手には負えないかな、と感じましたね。震災後のボランティア活動などで個人の力の限界を感じたので。最初は復興というのがテーマだったので、頑張ろうとかいう感じだったんですが、それで自分が疲弊していったものですから。で、考えぬいて出た答えが、自分たちがやっていることは街づくりなんだと思ったんですよ。復興と考えるとゴールがいつか分からなくなるんですよ。分からない中で走っていくのはとても難しいこと。街づくりは、街がある限り続いていくじゃないですか。自分が死んだ後も続くものだから、託せるわけじゃないですか。そしたらゴールはないんだけど、自分の中のゴールはあるみたいな感覚だと思うんですね。そこに考え方をシフトしたら、だいぶ楽になりましたね。

池田 震災以降のご自身の経験からそこが一番重要なんじゃないかと？

西野 そうですね。

池田 説得力のあるお話ですね。今日はどうもありがとうございました。